

「四方僧伽運動の現況と未来～上行プロジェクトとしての活動報告～」

講師：上川泰憲（かみかわ・たいけん）

本化（ほんげ）ネットワーク研究会 4月例会での講演。

日時：2014年（平成26年）4月24日（木）午後6時。

会場：新宿常円寺祖師堂 3階会議室

【目次】

開会のあいさつ（澁澤光紀・西山 茂）

1. はじめに
2. 四方僧伽とは
3. 妙法の行進・世界同時平和法要
4. 関係国でのプロジェクト
5. 仏陀バンク
6. 仏陀バンクでの経験
7. 地域通貨「ボーディ」
8. プロジェクトの評価

講演終了後の質疑応答

脚注

開会のあいさつ

澁澤光紀：それでは、これより四月の本化（ほんげ）ネットワーク研究会(1)（以下、本ネ研）例会を開催いたします。まず、主宰の西山茂先生よりご挨拶をいただきます。

西山 茂：皆さま、本日のご参集、有難うございます。今日は「四方僧伽（しほうさんが）」という、本化ネットワーク研究会とも姉妹の関係にある運動体のお話をお聞きします。もう十年前になりますが、本化ネットワーク研究会の立ち上げの会議をした時に、井本勝幸さんもこられていたんですね。その後に井本さんは四方僧伽を設立されて、一緒に運動をやっているかといってくれたんですけども、本ネ研はやはり研究会的の性質が強いということで、何度も夏季セミナーでは発表いただいていたのですが、なかなか一緒に活動ができずに来ました。しかし、現代社会において、本化仏教(2)をどう再歴史化して、どう現代に活かした活動をしていくべきなのかという問題は、共有しているんです。別々に運動を始めたんですが、そんなことで両者は、二つながら一つの関係にあるわけです。

とはいえ本化のネットワーク運動ということでは、四方僧伽は東南アジアを中心に、台湾、チベットも結びながら実践的に活動しています。また井本さんは、代表者の座を降りられて、現在はミャンマーの少数民族の問題に深く関わって、ミャンマーの政府と少数民族の諸派との調停役として、その歴史的な和解の裏方として大活躍されたということがあるわけですね。ですから、私は四方僧伽の活動は、本ネ研でいう「四菩薩（しばさつ）プロジェクト」(3)の中では、実践的に立正安国を目指す「上行（じょうぎょう）プロジェクト」(4)の模範例だと思っています。

今日はその辺の海外活動の現況も含めて、この4月から代表に就任された上川泰憲師にお願いして、四方僧伽という運動体がいかなる経緯をへて今日あるかということをお話して頂き、その今後の課題なども参加者とともに話し合っていければと思っています。どうぞよろしくお願ひいたします。

澁澤：それでは、本日のテーマならびに講師先生をご紹介させていただきます。まず、本日の「四方僧伽運動の現況と未来～上行プロジェクトとしての活動報告～」というテーマですが、先ほど西山先生の話にありましたように「四菩薩プロジェクト」の中での「上行プロジェクト」として四方僧伽運動を取り上げることをお願いしたところ、「上行プロジェクト」という言葉を活かしていただき、この講題となりました。（講師の上川より）コメントとしていただいているテーマ説明を読ませていただきます。

「井本勝幸師が立ち上げた四方僧伽運動の現在までの活動報告と、今後の展望について報告させていただきます。四方僧伽は、現在東南アジアの仏教徒と、連帯して主に二つの活動を中心に展開しています。世界同時平和法要は、仏教者が世界の平和をともに祈り行進することにより仲間意識を持ち、参加国の諸問題を共有し、問題解決の道を探る話し合いをしています。これによりどのような問題を抱えているのか共有することにより、現地目線で、ニーズにあった問題解決のためのプロジェクトを立ち上げ、現地の僧侶とともにプロジェクトを進めていきます。仏陀バンクも話し合いで立ち上がったプロジェクトの一つで、東南アジア各国では貧困や戦争の背景には、経済の問題が大きくかかわっていて、問題提起されました。仏陀バンクは、無利子による小規模融資と、地域通貨を併用することで、コミュニティの自立をサポートしていくことが大きな狙いです。このような四方僧伽の活動と理念を理解していただき、皆様とともに平和な世の中を作り上げることができればと思っています。」

こういうコメントをいただいております。上川泰憲先生の略歴を申し上げますと、昭和48年北海道夕張市生まれ。法華宗（真門流）のご僧侶ですが、平成4年に宗派を問わず受け入れる池上本門寺の隨身生となられて立正大学に入学、本門寺から通学して平成8年に卒業されますが、この本門寺隨身生のときに井本勝幸さんとご一緒だったんですね。それで、卒業後、北海道のご自坊の副住職としてつとめられて、平成12年「第一回妙法の行進」で初めてカンボジアに、以降毎年平和行進、平和法要に参加して、平成18年に「四方僧伽・北海道」を発足され、写真集やチャリティ・カレンダーを発行、各プロジェクトの募金活動、仏陀バンクの地域通貨を展開。平成26年四方僧伽新代表に就任。この四月に新代表になられたと、ということです。

それでは、これより一時間ほどの御講義をいただきます。その後に質疑応答もありますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

（拍手）

上川:ちょっと電気を消していただけますか。最初にVTRを視ていただこうと思います。

(四方僧伽の活動を紹介する動画上映)

1. はじめに

上川：VTRは続くんですけども、このまま少し流しておきます。皆様、はじめましてというか、ずいぶんど無沙汰しております。北海道から参りました上川泰憲と申します。今年の（平成26年）4月にですね、（四方僧伽の）代表に就任させていただき、小島代表（小島知広）からバトンタッチをさせていただきまして、大役ながら受けさせていただくことにしました。

もともと先ほどのお話からあるように、四方僧伽は井本勝幸さんが立ち上げた団体で、彼は四方僧伽運動というふうに、位置づけています。井本さんとの出会いというのは、日蓮宗の大本山であります池上の本門寺の隨身生として、お寺の修行をさせていただきながら、（立正）大学に通っていました。大学2年生のときにですね、一つ学年の下として、年齢は（井本さんのほうが）10ぐらい上なんですけども、私が19のときに彼と初めて出会いました。（池上本門寺の隨身生は）先輩後輩の関係で非常に上下関係が、厳しいところなので、なかなかあまり話す機会がありませんでした。（井本さんが）卒業間じかです、たまたま大学の授業が一緒になりまして、ほかの授業を受けている仲間が誰もいなくて、みんなサボって帰っちゃったんですね（笑）。で、たまたま井本さんと二人きりになって、ちょっと帰り、一杯飲んでこうかって話になり、一緒に居酒屋へ。そのときに初めて彼がボランティア活動をしていた話を聞き、え〜、SVA?じゃなく
て・・・

齊藤：（小声で）JVC・・・。※（JVC＝日本国際ボランティアセンター・Japan International Volunteer Centerの略称）

上川：JVCですね。JVCに入ってソマリア行ったとか、カンボジア難民を受け入れる仕事をしてたんだみたいな話をしてくれて。非常に感動というか、感激というか、「すごいことをしてきたんですね」っていうことになって、そのときに、何か自分で手伝えることがあったら、いつでも声かけてくださいと、かたい握手をしてました。その10年後に連絡が来まして、「上川さん、準備できましたんで一緒にカンボジア行きましょう」というふうに連絡があり、僕も二つ返事で「よし、いくか!」って言って、一緒にカンボジアに行きました。

カンボジアでの印象というのは、その後の私の考えかたに、おおきな、何かを与えてくれた場所でした。カンボジアに行ったときに一番最初に何を思ったのかというと、非常に貧しい国でした。過去の歴史も、非常に厳しくて、ポルポトの話なんてのは、すこし前の話で、まだその傷跡が非常に残っていた状況でした。未だにその状況を引きずっていますけれども。その中でも、カンボジアは貧しいけれども、子供たちの笑顔が非常にすばらしい。逆に日本は、物質的には恵まれているけれども、なぜ、カンボジアと空気感が違うんだろうかって言うことをカンボジアにいたときに考えたんですね。で、それが、何でなんだろうかっていうふうに、今でもまだ答えは出てないんですけども、その答えを追い求めているというか、私の原点というのはそこにあるんです。

2. 四方僧伽とは

そのあと、井本さんの後をついてまわりながら、がむしゃらに10年間やってきました。四方僧伽の意味は、四方っていうのは東西南北のことなんです、僧伽（さんが）っていうのは僧団、集まり、仏教では「お坊さんの集まり」ですけども、そうではなくて、人が集まったときには「僧伽」なんだと。私たちはこの事を、「四方僧伽」というふうに、定義づけてます。Catuddisa Sangha(チャテウディサ・サンガ)って言うふうに、サンスクリット語では言われるんですけども、それで通称ですけども（略して）「CS、CS」というふうに言っています。カンボジアだったり、タイであったり、チベットだったり、仏教国の人たちに「なにがやりたいんだ？井本は？」と言われたときに、「Catuddisa Sanghaやりたいんだ」って言ったら、みんな、わかるんですね。ちゃんと、その教えは仏典の中で、上座部（仏教）であろうと、チベット密教であろうと、ちゃんと通じていて、何をやりたいんだというと、それで（Catuddisa Sanghaという）、

一発で、よしわかったって言うふうになるんですね。ですから、私たちは、新たなものを立ち上げてるんじゃなくて、(仏教の)原点回帰として、宗派、教えを超えて、仏教者が手を携えて、平和の構築を担っていきましょうというふうに考えております。

3. 妙法の行進・世界同時平和法要

井本さんからの誘いのあったカンボジアでなにをやったかという、「妙法の行進」というのを始めたんですね。3年間やったんですけども。いわゆる「妙法」ですから、『法華経(妙法蓮華経)』を信仰している方たちと一緒に、カンボジアの仏教者と「平和行進」「平和法要」をしようというのが目的でした。それはなぜ「妙法の行進」というのになったかという、カンボジアに有名なお坊さんがいらしゃって、マハ・ゴサナンダ(Maha. Ghosananda) (5)というお坊さんがいらしゃってですね、その方が、平和行進をされたんですね。それは「法の行進」というふうにいわれていました。

井本さんはそのマハ・ゴサナンダさんの事を尊敬されていて、師の継承として、平和行進をしようということで、妙法の行進というふうなネーミングで開始をしました。第一回目の妙法の行進のときに、当時の事を思い出した時に、当時は全然わからなかったんですが、その、マハ・ゴサナンダに会えるチャンスがあったんですね。「今だったら会えるって」と井本さんが言われたの思い出して、そのときの、プロジェクトの代表だった土屋さん、顕本法華宗のお坊さんですけれども(6)、土屋さんが、「(マハ・ゴサナンダ師は)ちょっと政治的な力が強いから今回はやめておこう」というふうに、会うのをやめてしまったんですね。たしかその翌年だったと思うのですが(マハ・ゴサナンダ師は)亡くなられたんですね、唯一そのときのチャンスだった。あの時会っておけばなって言うふうに、今は後悔しています。

「妙法の行進」自体は、3回カンボジアで開催されて、その後、土屋さんはインドのご縁ができ、インドにて「妙法の行進」を開催されてます。そのあと、私たちはカンボジアでまだ続けたほうがいい、インドはまだ焦らなくてもよいとの井本さんの判断で、カンボジアにベースをもちたいということで、(プロジェクトの)名前を変えて続けようということで、何がいいかなって、いうふうに考えて、この時「世界同時多発テロ」(2001年9月11日)というのがあった時期なんですね。これを平和的なネーミングに変えて、開催しようということで、「世界同時平和法要」という名前にモデルチェンジをして、開催を始めました。そのときに、新たに取り入れたのは、ただ、行進をして平和法要をするだけじゃなくて、いろんなワークショップやディスカッションも入れて、それぞれ国が抱えている問題とか、仏教者として何ができるんだろうかっていうことを続けていったんですね。各国の僧侶や一般在家の参加者で話し合いました。そして三つの大きな問題があるのじゃないかと答えが出ました。それは「農業」「環境」「経済」。この3点を四方僧伽として解決の為のアクションを起こしていくのが基本的な考え方としてあります。これは、私たち日本人が、こういうことやろうと提案したのではなくて、参加仏教者がみなでディスカッションした結果として、この三つじゃないかというふうに、チョイスされていったものです。その三つの問題提起と、(四方僧伽の)プロジェクトにも関わってくるんですね。

4. 関係国でのプロジェクト

この問題を改善していこうということで、たくさんプロジェクトが立ち上がりました。継続していったりとか、プロジェクトの内容によっては終了していったりとか、もちろん上手くいったものもあるし、上手くいかなかったこともあります。(四方僧伽の)プロジェクトの視点としてですね、草の根的というか、グラスルーツ(grass roots)というか、ほんとうに困っている人たちの目線に立ってですね、現状をよい方向に変えていこうというふうに動いていくのが特徴です。そのもう一つの特徴としては、村のお坊さんにプロジェクトの中に入っていただく。その地域のお坊さんに入っていただくことによって、その、村人と、四方僧伽のプロジェクトリーダーと、僧侶と、それぞれが話し合いを持つことによって、推進していったらどうしようをお願いしております。

資料なんですけども、四方僧伽の「プロジェクト表」というのがあります。ビルマ、バングラデシュ、タイ、カンボジア、チベット、日本と、今までやったプロジェクトが全部ここに載ってます。先ほど数えてみたんですが、51のプロジェクトを行ってきました。

プロジェクト内容としては、「緊急支援活動」。例えば災害とかですね、貧困とか、そういう緊急を要する時に支援する、緊急支援プロジェクトですね。それと、「自立支援プロジェクト」。継続的に、そのエリアの人たちが、生活の水準が、ある一定の水準、いわゆる衣食住に困らない水準までをサポートしようという自立支援プロジェクト、この大きく二つに分けてやっております。

5. 仏陀バンク

最近の内容には、農業と環境のことよりも、経済的な部分が、非常に大きな、(諸問題の)元凶になっているんじゃないかということで、「仏陀バンク(ぶつだ・ばんく)」というプロジェクトを進めています。ただ地域によっては、お金の貸し借りというのはなかなか、難しかったりとか(仏陀バンクが)上手く機能しない所もある。例えばカンボジアなんかは、もともと農業国なので、お米をベースにした「ライス・バンク(米銀行)」。種籾の貸し借りですね。種籾を貸して、収穫したときに何パーセントか戻していただくという、プロジェクトのほうを推してます。バングラデシュなんかは、「地域通貨」とか「マイクロクレジット」なんか認知されていて比較的上手く回っています。

BOB(仏陀バンク)は、大きく二つに分かれていて。一つは「マイクロクレジット」、小規模融資ですね。個人に対しての小規模な融資。現地は物価の格差があるので、例えば日本円でいうと1万円とか2万円とかをお貸しして、定期的に返していただく。一方は、「地域通貨」です。コミュニティによって、お金を介さないで人と人が助け合う、自分たちの生活を向上させていこうということです。考えとしては二つの柱になっていますが、やはりその、地域通貨のほうは、なかなか理解が難しいみたいで、頭で理解しても、まだ上手く機能していない状況です。やはり、現金のほうが使いやすいというか、なかなか進んではいませんけれども、小規模融資のほうは、非常にいい形で回っているのが現状です。

なんか、ちょっと、こう、空気が重いですね(笑)。なんかちょっと、プレッシャーが(笑)、なんか久しぶりに、こういう人前で話すとなんか緊張して、駄目ですね(笑)。

6. 仏陀バンクの経験

この(配布資料を示して)「仏教は経済に何ができるか?」っていうのは、大阪の應典院さんで、いちど、「お寺ミーティング」というのを開催されており、それに呼んでいただき、「仏陀バンク」の話を見せていただきました。仏陀バンクに関しましては、海外もそうですけども、国内でも何かやろうということで、実は北海道で、(私が)仏陀バンクを3年間ほどやったんですね。ただですね、マイクロクレジットに関しては、貸金業という法律に引っかかるらしくて、現金の貸し借りはやらずに、地域通貨のみをやってみました。北海道はもともと地域通貨が何ヶ所にも町ぐるみでやっている地盤があったので、それと、そういう(地域通貨の)活動に興味のある人が多かったので、関心を持ってくれる人が多かったです。

今回、チャレンジした内容としては、地域通貨の地域性を取っ払った形で出来るんじゃないかっていうふうに考えてやってみたんです。地域性を取っ払うことが、「仏陀バンク」の一番の肝(きも)で、その、村単位で、コミュニティ単位で、(交換が)ある程度形成できるようになってくれば、例えば、衣食住の担保がある程度できてくれば、もしそのコミュニティに何か、無い技術、そのコミュニティには大工さんがいなかったとしたら、隣のコミュニティで技術を持っている人が来てケアできるんじゃないかっていうのが、そういうコミュニティが、ずーっとつながっていく。助け合える関係が出来てくるんじゃないかとの考えがあったんです。そうすると、今度は国境を越えて、経済的なつながりも出来ていくんじゃないかっていうことがありました。

ただ現実的にやってみると、やはり、地域が遠い地域になってしまうと、(現場に)行くまでに、お金がかかってしまう。例えば、バスで行ったりとか、車で行ったりとかしても、その距離的な負担が大きくて、そこがまず繋がらないということと、あと距離が離れていると、同じ、「仏陀バンク」に入っているっていうことは認識されていても、やはり関係性が深まっていかないっていう問題点がある。(物理的な)距離が、人と人との距離も遠ざけていました。そのような理由で地域を限定していた事が、実際に経験してみてもわかりました。

ただ、地域を取っ払ったことの、よかった点もあり、自分たちで地域通貨をやってみたいけどどうやったらいいかかわからないっていう人たちが結構多くて、北海道でも、あちこちに呼ばれ話をしました。とりあえず自分たちの仲間でもやってみようというふうに、決断して次に進んでいった人達のグループっていうのは、

結構多かったです。その中で、どのように輪を広げていくのか？どうしたら、皆さん知ってもらえるのか？という所の、壁ってというのがあって、なかなか上手く機能しなかった、広がらなかったっていうこともありましたが、それでも、2年目で200人のメンバー、3年目で300人のメンバーになったので、基本的な地域通貨の考え方は知ってもらったんじゃないかなと。いざというときには、また機能することも可能だろうと思っ
てます。

7. 地域通貨「ボーディ」

それともう一点は、四方僧伽が「仏陀バンク」「地域通貨」をやるっていうことで、私が内容の説明に行くわけですね。「こうやったらいいですよ」って言うと、もともとその地域通貨っていうのは、人に何かをしてあげるっていうことは、利他的な行為であるというふうに考えたわけです。人から何かをしてもらうっていう事は、その利他を受ける側の立場になる。受けたからまた、今度返そうという、その地域通貨の単位っていうのは「ボーディ」っていう単位にしたんですね。これは「菩薩」という意味で、「1ボーディ」とか「10ボーディ」とか「100ボーディ」とか、その「ボーディ」を交換して、サービスや物を交換していく。その「ボーディ」って何かって言う説明をすると、「菩薩って何？」とか、それってどういうことなんだろうとかっていう、仏陀バンクを入り口として仏教に興味を持つ人が多かったです。そういう話を聞ける場って言うのが、今まで無かったとか、私の予想してない部分の反応が非常に大きくあって、それも非常にプラスだったなっていうふうに思ってます。

仏陀バンクの話の中で一例として、自分が何かをしてあげると言うのは自分が菩薩の立場になってしてあげるんだ。でも、してもらう人がいなかったら、自分は菩薩の立場にはなれないんだ。逆に言えば、してもらうときに相手が菩薩で、自分がそれを受けるほうになるんだ。で、それをどんどん繰り返していくと、その時点で、みんなが菩薩集団なんだっていうふうに捉えられるんじゃないだろうか。この話しをすると、非常に納得されることが多かったです。

あともう一つ面白かった質問が、「ボーディ」の交換っていうのは、数字的な交換っていうのに非常に抵抗があるって言われた方が多くて、自分が行うことに数字的な価値をつけられることに、非常に違和感を持つというふうな方が結構多かったです。逆に言えば、数字を介さなくても、ゼロ・ボーディ交換なんじゃないかっていうことを、提起してくれた方がいました。例えば、電車でお年寄りが、自分が座っているときに席を譲ってあげたっていうのは、それでも心の「ボーディ」交換になっているんじゃないか、とのことを参加者から言われて、「ああ、たしかにそうだな」っていうふうに思い、(数字を用いた方法は)「最終的には無くなったほうがいいんですよね」と言われて、「それはもちろんそうだと思います」と答えました。たくさん学ぶ事が出来ました。

この資料の中で、3枚目に應典院の山口主幹から、「仏教は経済に対して何ができるのか？」っていうところですね。私のなかでは、「あ、なるほどな」っていうふうに思えました。ちょっと読んでみますね、

上川さんの話を受けて、山口主幹から、**仏教経済学は寺院経済学や寺院経営論ではない。「どう生きて死んでいくのか？」**という問いの中で、「**お金という存在をどう重ねていくのかというテーマだ**」と前置きし、三つの論点が提示された。ひとつめは「**お金という道具における物語の豊かさをどうもたらすのか**」、ふたつめは「**経済的な満足度と人生の幸福度をどのように関連づけるのか**」、そして最後は「**価値を交換するのではなく贈与していく経済として地域通貨をどう活用できるか**」ということだ。

(「**仏教は経済に対して何ができるか?**」『お寺MEETING vol.5』10ページ)

このように、言われたんですけども。お金って言うことをどう捉えてたらいいいのか？経済って言うものをどう捉えていったらいいのかって言うことを、ボクらは学んできたんじゃないかなって思ったんですね。直接的に活動して、人が救われていく所をもちろん見るし、それが原因でトラブルになるところも、現場としてはあるんですね。非常に端的に感じるのが、お金は人によって捉え方が非常に違うので、それを仏教者というか、私たちはどう捉えて、人に伝えるべきかを勉強させていただきました。

(山口主幹は)地域通貨についてこうも言われたんですね。収奪なんだって。相手から奪うことなんだっていうふうにも言われたんですね。それは何かを、サービスをする、例えば「ボーディ」交換をして、何かをしてあげるっていうことは、「してあげた方」は優越感があるけれども、「してもらう方」は心をとられ

てしまうと。「今度は何かを返さなくてはいけない」など、そういう気持ちを起こさせることも、現実としてある。そのように聞いた時に、そのようには考えていなかったなって。だから、実際やってみて、いろんなことを新たに考えさせられるっていうことは、現在（四方僧伽の）51のプロジェクトをやってきましたけれども、そのすべてのプロジェクト、すべての現場において、自分たちがいろんなことを学び、経験し、そして考え、次に何をしようかというふうにするための、動くためのまたステップになっていっているんだなというふうに思っています。

8. プロジェクトの評価

成功とか失敗とかっていうことよりも、じゃ次はどうしていくという考えしか、ボくらにはなくて、プロジェクトはなかなかヒットしないんですね。カンボジアであっても、バングラデシュであっても、現場の考えは、ボくらにはわからない部分が非常に多く、現場のプロジェクトリーダーに任せるしかない。人をどう生かしていくのか？人とどう関わっていくのかっていうことを、もっと学んでいかなくてはいけないと思っております。

四方僧伽は最近会員制に移行しましたがけれども、もともとは、皆さんの浄財っていうか、お布施をいただいて、それを活動資金にしてプロジェクトを開始するという方法を取ってきました。いろいろと「作務衣」作ってみたりだとかやったんですけども、なかなか現地の物っていうのは、クオリティーが上がっていかないんですね。自分たちでできることって何があるんだろうと友人で写真家の伊勢祥延（いせ・よしのぶ）さんと一緒に「チャリティ・カレンダー」という形で、毎年発行して、みなさんに募金をいただいて、協賛していただき資金を作って、向こうのプロジェクトに使っていただくということでやっています。チャリティ・カレンダーは（四方僧伽のプロジェクトを実施している）現地の写真だけではなくて、いろんな世界中のいろんな問題を持った国とか人とかがあるので、伊勢さんが考える一番いいカレンダーを作り、皆さんに買っていただく形でやっております。

この（カレンダーの）一番最初のページにですね、この、今まで出したカレンダーの表紙が載っていて、下に（カレンダーの協賛金・売上金）がどのように使われたかっていうようなことが記載されています。次年度のカレンダーに今年度（前年度のカレンダーの協賛金・売上金）の使用目的というか、どういふのに使ったかっていうような事を掲載させていただき報告とさせていただきます。それと、（四方僧伽の）ホームページとかに、どのように使っているかというのを掲載させて、皆さんにお知らせするというふうにしております。それで、（カレンダーの）一番最後のページに、協賛という形で、いろいろなお寺の、各宗派のお寺の方に協力していただきながら、団体賛助という形で協力していただいて、あと下のほうには個人賛助という形で協力していただいた方は名前を載せさせていただきますとさせていただきます。

それと麻布の香雅堂というお線香屋さんに、「名香 四方僧伽」というお線香を作っていただいて、その売り上げを、四方僧伽のほうに寄付していただいております。あとは個人が、このプロジェクトに（特定のプロジェクトに）出資したいというか、それをサポートしたいという方の、浄財というか、仏施（ぶっせ）。お布施をいただいて、それを直接現地に持って行って、目的にあった（布施の趣旨に沿った）、プロジェクトへの出資という形でさせてもらっております。去年は（2013年・平成25年）、日蓮宗からは、「ライスバンク（米銀行）」に出資していただいております。あと団体では、アイハン（IHAN=国際ヒーリング看護協会）という、ヒーリング協会という所からも、お金をいただいて、カンボジアで井戸を4基造っています。

一応、そういうことで、ボクの話はいったん終わらせていただくんですが、次は大法さんにバトンタッチをして、という形でよろしいですか？

※（斎藤大法師の講演「四方僧伽運動から導き出される地球平和構想」については、都合により割愛しました。）

澁澤：ありがとうございました。

（拍手）

講演終了後の質疑応答

澁澤：それでは、質疑応答に入りたいと思います。初めに司会の方からお聞きしておきたいことがありま

す。一つは、レジユメにあるように「妙法の行進」の話から四方僧伽の歴史が始まっていますので、その「法の行進」についてです。マハ・ゴサナンダ (Maha. Ghosananda) 師が「法の行進」を行っていて、それを引き継ぐ形で「妙法の行進」を始めた、ということ以前に井本さんから聞いていたのですが、この「法の行進」というのは、日本山妙法寺の藤井日達(1)師の影響ではないかと思うのですが。おそらく東南アジアの仏教徒は、行脚とか行進とかはしなかったと思います。ですから、アジア仏教に対して大きなインパクトを与えた日本山妙法寺の活動がそのベースにあって、マハ・ゴサナンダ師もやはり、その影響下において「法の行進」を行ったのではないのでしょうか。ですから、「法の行進」から「妙法の行進」になったということは、また再び南無妙法蓮華經の「妙法」の行脚に還ったのではないのでしょうか。その辺りをお聞きできればと思います。

もう一つは仏陀バンクですが、ノーベル平和賞をもらったユヌス(2)ですね、ユヌスの「グラミン銀行」の小規模融資（マイクロクレジット）の要素を取り入れています。そこで構想されているのは、やはり仏教徒の相互扶助だと思えます。仏教徒の経済的自立を図りながら、仏教徒の相互扶助の共同体として、大きく言えば資本主義的な貨幣経済に対抗していくというようなことがあったんだろうと思うのです。その点をもう一度くわしくお話いただければと思います。

上川：そうですね、もちろん藤井日達さんのお話っていうのは、「法の行進」に非常に大きな影響力を与えていますし、ガンジーさんも影響されてたっていうのは、法華的の教えの中であるし、太鼓たたいて歩くっていうことが、どのようなインパクト与えていたのかっていう事は、非常に想像しやすいと思うんですけども、現在でも世界各国で皆さん、日本山の方は歩かれて、本当にすばらしい活動をされていると思います。

井本さんの考えの中で、「妙法の行進」から「世界同時平和法要」に切り替えていったっていうのは、正直な話し、日本国内向けに考えたときに、法華経信者だけを相手にしていいんだろうか？っていうところに行き着いたんだと思うんです。それは、彼の口からは何度か、聞いてますが、「内外相對（ないげそうたい）」(3)の問題をどうとらえて行くのか、当時の主だった考えとしては、上座部（仏教）を、卑下するというか、下に見る僧侶の方が多かったんですね。最近も、そうでもないんですけど・・・

澁澤：日本のお坊さんですか？

上川：日本の法華のお坊さんがね。やはり「法華最勝（ほっけさいしょう）」(4)という気持ちが大きかった。私自身もそうだったからですね。法華経はすばらしいし、最高の教えだとの立場から、では「内外相對（ないげそうたい）」の問題で、内典外典（ないでんげでん）(5)と、外典（げでん）を切り捨てておしまいか？と井本さんはとらえたときに、一度「法華最勝」まで行って、また戻って行くべきとの考え方に行き着いた。そのキーポイントだったんじゃないかなと。「妙法の行進」から「世界同時平和法要」に名前を切り替えたのはそこがポイントだったんじゃないかって。

それともう一つは、井本さんが力を持つっていうのは、どう考えていたかは、非常にシンプルで、「数の理論」だって言うんですね。数！やっぱりかかわる人が多くなるのが、パワーになるという、その力を持つっていう事で、例えば不買運動とか、デモとか、そういう力って言う事を実践したことは、仏教徒全体を見回しても、なかなかそういう動きがなかった。その、力を持つという中で四方僧伽を立ち上げたっていう事も、一つあった。実際、本人から聞いてますんで、そういうふうに（井本さんは）言われてますね。

その中で、宗派を超えていくというか、日本の国内向けにもそうだし、もともと海外では、上座部とも一緒にうまくやってますし、チベット密教ともうまくやっている。その時点で大乘でも宗派を超えてるし、法華でも宗派を超えているのに、何で（日本）国内ではできないんだろうかという事は、シンプルにあったので、舵きりというか、このようにしたというのが現実的な流れです。

ただ、私も法華の僧侶ですんで、その気持ち自体はもちろん忘れてないし、そう思って、何でもいいとは思ってないですけども、それが、こないだ澁澤さんから教えていただいた、本化ネットワークの「七訓」ですか（「現代本化人七訓」(6)）、

澁澤：西山先生が作られた現代本化人の心得ですね。

上川：あれを読ませていただいて、非常に安心したというか、ああ、こういう事を自分はイメージして、文章化していただいたな、というふうに関心非常に感謝しています。

澁澤：西山先生の考える本化人は在家・出家を問わずだと思いますけども、いまのお話ですね、結局、大乘仏教の意識を持った日本のお坊さんが上座部仏教のところに行って、自分たちは大乘だから優れているといつても、戒律を当然とする上座部の方々にとっては、日本のお坊さんをお坊さんとは思いませんよね。

上川：ええ、そうですね。

澁澤：要するに世俗の、在家の人がお坊さんのような格好をしているだけであるという、まあ、この落差が、常にあったと思う。ですから、まあ援助してくれるということで日本のお坊さんを認める場所があったんじゃないかっていうふうに思いますけども。しかし、井本さんがやろうとしたのは、そういう援助という形ではなく、自立という問題があるわけですよね、現地において自立するという。日本の方が支援して、向こうは支援されるという関係じゃなくて、相互扶助的に自立していく仏教徒の経済共同体を作っていくという事があったと思います。

そもそも、アジア全体の仏教が、一体になるって言うことなかったわけですよね。それがちょうど、エンゲージド・ブディズム(7)という言葉も生まれてきた時期に、アジアの仏教徒をネットワークする、四方僧伽ネットワークを作るという構想が、画期的だったと思います。つまりチベット、カンボジア、ミャンマー、あと台湾、そういった方々と一緒に、ネットワークをつくっていったということの意味がきわめて大きいと思うんですけども。ですから、いま現在、仏教徒が一つの共同体であるという意識はないと思うんですけども、それを文字通りの意味での四方僧伽という、理想の仏教徒の共同体を作っていくのか、その間をどう埋めていくのか、皆さんからもいろいろご意見を出していただければと思います。

西山：実は『シリーズ日蓮』に「本化ネットワーク運動」のことを書くので、四方僧伽の資料を読ませていただきました。それで分かったことの一つは、全宗教相手にしてんじゃないということですね。キリスト教、イスラム教を相手にしていない。むしろ、「五重相対」の教学(8)から言えば、「内外相対(ないげそうたい)」で、まず仏教徒の一体化から始めようということが一つあります。何でキリスト教やイスラム教は除外するかというと、仏教が一番平和的だからという理由を上げていますね。

それから、仏教を背負い込むと、「サンガ(僧伽)」っていう言葉があるので、四方僧伽っていう名づけ方、しかも仏教の伝統的な考え方だと、サンガっていうのは、僧侶の用語で、これを(意味を)もっと広げて解釈しようとする。つまり、齊藤大法さんも言われた「目覚めた個人」ですね、すべての目覚めた個人の集まり、またはそのネットワーク、これをサンガと呼ぶわけです。四方僧伽の運動はそういう事の実現を目指すんだと、という事があるわけです。そういうふうにサンガという概念を拡大解釈しています。そういう理解でいいのかなのかという事があります。

それともう一つ、行進について。法の行進から妙法の行進に変えて、それが世界同時平和法要になっていったという経緯を話していただきました。その「法の行進」の「法」というのは、ダルマ(9)だろう。そして「妙法」っていうのはサツダルマ(10)です。じゃあ、ダルマとサツダルマとはどういう違いがあるのか。これは、いわゆる「上座部仏教」(11)と我々「法華」との違い(12)はあると思うけど、ダルマとサツダルマ、「ダルマ(法)の行進」を何であえて「サツダルマ(妙法)の行進」にしたのか、ということがあります。

いま「妙法の行進」は、インドで土屋さんが行っているわけで、四方僧伽とは袂をわかっているのですが、それを見て、そんなに狭く理解していいのか？上座部の人と連帯、数の問題、数が多いほうがいい。上座部とやって、組む場合は、サツダルマと言わない方がいい。そういうこともあって「世界同時平和法要」と言っているんじゃないか？と思うんですね。その辺の、ダルマとサツダルマの違いですが、なんで井本さんは、そんなサツダルマを「世界同時平和法要」と言われたのか？土屋さんは、(そうは)言わないでインドで(妙法の行進を)やってる。両者の布教観と言うか、宗教観はどこが違うんだろうか？運動観というかね。ちょっとわかんないので教えてください。

上川：そうですね、難しい・・・(苦笑)。井本さんじゃないので、その真意は分かりかねるのですが、まずですね、大乘仏教徒や法華信者が、上座部とどう付き合っていくかっていう事に関して言えばですね、井

本さんは、“friendship”だと。友達になれと、「目覚めた個人」であれば、上座部でも大乘でも密教でもかまわないといわれています。

西山：なるほど、目覚めた個人であれば友人になれると。

上川：そういうスタンスを取っています。そのお友達として一緒に世の中を良くしていこうというふうに思っている人であれば、ウェルカムだと。それは、仏教じゃなくてもいい。ウェルカムだと。キリスト教でもイスラム教でも、無宗教でも、みんなでやっていこうと言う意味での「サンガ（僧伽）」と言う位置づけをとっています。

それと、“グラスルーツ”（grass roots）、「草の根運動」との言い方をしているのは、そういう仏教的な歴史と言うのも、もちろん考慮しながらも、いちばんの問題っていうのは、民衆が苦しんでいることなんだ。その苦しみを、僧侶たるもの、解消しようとして、布施をしていただくだけで、生活していいんだらうかっていう問題提起を、上座部の方たちに毎回しています。で、もちろんその中で、私たちのことを僧侶と認めない・・・、別に認めてほしくてやっているわけじゃないんですけど（笑）、認めないで、かたち上、そういう行進とか法要とかして、ほかの（四方僧伽の）活動には関わらない僧侶の方もたくさんいます。そちらのほうが多いです。でも、その中からすごく共感して、一緒に活動したいといわれる方もいます。だから、私たちとしては、そういうふうに目覚めた個人として、一緒に宗派を超えて活動していただける方と、やっていこうというのが、基本的なベースとしてあります。

それと、「妙法の行進」と、「世界同時平和法要」のネーミングが、最初はシンプルに、「同じ名前で行ったらマズイよね」ということだったんです（笑）。なんか別の名前を考えようかっていうことになって、井本さんが「世界同時平和法要ってどう？」っていうことになり、じゃそれでいこうというふうになったのが経緯なんですけども、結果としては、その流れになってきている、「妙法」という事に拘らず、内に秘めて、外ではこのような形をとっていくという、選択をしています。

「施本」(13)は、「妙法の行進」のときは、カンボジア語に『法華経』を翻訳して、それを配って歩いたんですけども。現実的には、なかなか読まれなくて、次の日にはお店で売ってたりとか・・・（笑）

会場（笑・笑・笑）

上川：そういう現実があつて、自己満足になって来ているんじゃないかなっていうのが、私と井本さんの意見で、「意味あるかな？」っていう感想を抱き、それよりも、もうちょっと違う形でのアクションのほうが有効的なんじゃないかなと思いついたとき、「妙法の行進」第3回目に、（カンボジアの）バツタンバンっていうエリア(14)なんですけども、雨が2年間降らなかったんですね。水がなくて、米が作れない。もう（住民が）餓死していると、木の皮食べて何とか命つないでるっていうのが、（カンボジアの）宗教省の副大臣から「なんとかしてくれないか？」って要請してきたんですよ。その時に私たちは現地には行きませんが、井本さんは現状を視て来ました。もう行ったら何をしなければいけないかってのは、（住民たちは）自分達が何をしなければ行けないか解っているんですよ。ため池を造らなきゃいけないんだって。ため池を造れば、何とかそこで生活できるようになるんだ。もう答えは決まってるけれども、お金が無くてできないという事だった。もちろん現地の、キエさんなんかはね、スタッフ・メンバーと一緒に行って、「やれるか？」って言ったら、「やれる」というから、では、「やろう」ということで、「仏陀の池」を造ったっていうのが、その（四方僧伽の）プロジェクトの始まりだったっていう流れなんです。

だから別に、土屋さんにはうらみも何も無いんです。もちろんインドで、「妙法の行進」を続けて、いらっしやるかどうかっていうのは、ちょっと定かではないんですけども。ホームページ（法華行者の会）では5回目までは開催した事が載っているのだから分かるんですけども、その後どうなっちゃったのかなって？というのはあるんですが。うち（四方僧伽）は、うちで、また違う形でやっていこうというような、流れがあつたっていう事でいいんですかね？

波田地：四方僧伽のカレンダーに、（井本勝幸著）『ビルマのゼロファイター』(15)っていう本の紹介がはいっていますが、これ前回も今日も、（本化ネットワーク研究会の）勉強会の予告のときにも、この本のこと紹介されていて、すごい人がいるなってね。今年50歳になられるかなれないかってね。その若さで、

それで、いわゆるビルマの内戦を終わらせるのに大きな役割を果たしたっていう事ですよ？で、少数民族の自立みたいなこと・・・、ということはもう、現在の「ハリマオ」かなんか・・・

(会場) (笑・笑・笑)

上川：ま、坂本龍馬か・・・ (笑)

波田地：そんな、日蓮宗系の僧侶が、日本人が、ビルマで、(そのような活動を)されたという、こういうことはもっと日本人知ってもいいことだし、また、井本さんがこれだけ現地の信頼を勝ち得るうえでの経緯ですね。さきほどの「仏陀の池」造ったりとか話しがりましたが、どうしてそういう一日本人の僧侶が、そんな内戦を終わらせるような力を発揮するまでになれたのか？

澁澤：この四方僧伽の資料ですが、1ページにあるビルマでの活動は、四方僧伽の活動として行っているんですよ。

上川：ええ、プロジェクト表の一枚目のBの4ですね。「ビルマ、カチン州、内戦IDP緊急援助」(16)。緊急援助の将来的なパイプライン構想。シェルター造ったりとか、難民の村単位で給水設備を整えたりとか、このプロジェクトはもちろん井本さんの流れもあったんですが、内戦によって被害を受けてる方たちに、手を差し伸べようということで行なった活動です。その(プロジェクト表)Bの5も、シャン州(17)でも同じような形での、緊急支援ですね。Bの6とBの7はカレン州(18)のKNU(宗教者会議)、これは、井本さんから要請されて行いました。カレン州っていうのは主な宗教がキリスト教なんですけども、もちろん仏教徒もいるのですが、そういう宗教者の対話をする会を四方僧伽でやらないだろうかとオファーがあり、ぜひやりましょうっていう事でやりました。これは宗教が違っても同じカレン州内でも対立が起きて、非常にまずい状況になる。(政府と少数民族との)和平交渉を後押しするのに宗教者の力が必要だろうというふうな形での、要請があったので関わってやりました。

実は井本さんが、ビルマに関わり始めたのは、四方僧伽の中で、ビルマのお坊さん、(その)彼と一緒にですね、ミャンマーでサイクロンの被害がありました。(2008年5月サイクロン・ナルギス)。あのときに、一緒に現場まで見に行ったそうです。これはオフィシャルじゃない形で。

澁澤:それは発表していただきました。(本化ネットワークの)夏季セミナーで。

上川：そういうことがあって、井本さんの基本的な、考えのベースとしては、見ちゃったらしょうがないって言うか、見たらもうなんかしなきゃいけないという思いが強くて、ビルマと関わっているうちに、どうも軍政がメチャクチャなことやってると。これは何とかしなきゃいけない。それと、あまりオープンにはできないんですけども、チベットの問題がある。いま、(チベットからの)ネパール・ラインが閉じているので、ネパール政府の政権が中国寄りに、変わってきている。あそこから(チベット人が)逃げて来れなくなったんですね。それで、別ラインを構築しなきゃいけないっていう事も関わっているんで・・・、

西山：：いまはチベット問題ですか？

上川：だから井本さんの目の先には、別に、ビルマで終わってないんで、まだ先があって、彼がこないだの講演のときに(2013年11月16日福岡市博多区の福岡国際会議場で「ビルマのゼロファイター」と題し開催)、話されたんですけど、(言うなれば)「援蒋ルート」(19)っていうのを造る。チベットに向けて。それは、着々と、いま進んでます。彼が(言うには)、ビルマの少数民族の方たちも、自分たちも今回助けてもらったから、今度は助けたいっていうふうな気持ちになってます。そういうラインが出来つつあります。これから中国国内に入っていくルートに関しては、まだまだこれからの構築ですけども・・・

波田地：じゃ、井本さんっていうのは、武器なんかも持っていたりはするんですか？

上川：持ってないです。

波田地：持たないで？

上川：持たないで、はい。その流れの中で、ビルマ問題に関わるっていう事で、関わり始めたときにですね、どうしても、少数民族のグループっていうのは、軍事政権っていうか、（少数民族自身が）軍を持って、自衛のための軍を持ってるんですね。（四方僧伽の）あるメンバーが、四方僧伽の代表が少数民族の軍事政権と関わっているというのは問題があるんじゃないかっていうふうな話が出たんですね。考えてみれば、確かにそうだ。そのときに一緒に活動した小島さん(20)がいらっしやっただんで、（四方僧伽の）前代表ですが、それじゃ（代表を）お願いできますか？って話になって、小島前代表のなかでは、私の（上川の）状況が整うまでの橋渡しとして、受けさせてもらうってことになりました。そのときに正式に（四方僧伽の）事務局を立ち上げて、私が事務局長として、事務的なことをする事を条件に、代表としてやっていただいた経緯がありました。それが今回（小島前代表が四方僧伽の代表の任を）代表を降りられたっていう経緯なんで、そのあとから（井本さんは）、12ある少数民族を全部回って各リーダーと話し合いをしたり、現実的に農業プロジェクトを起こして、各民族の生活をするための収入を得るために、いろいろなプロジェクトを、今でも徐々にやってます。農業学校を作ったりとか、現在進行形でやってます。

西山：ワサビの話だな！

上川：ワサビ！そうですね（笑）。あのう、チェンマイ(21)に、タイのチェンマイにはですね、日本料理店がたくさんあるんですよ。そこに、日本のワサビを作れば、売れるんじゃないかっていうことで、少数民族のエリアで、適性地を探して、長野から（ワサビの）苗を持って行って、今栽培を始めたところです。なかなか難しいみたいですけど。ただ、それが出来たら結構な収入になるんじゃないかっていうことですね。あと楮（こうぞ）っていうのを、紙を作る原料ですね。楮の和紙。それが、ミャンマーのエスニックの地域に結構たくさん生えて、自生しているので、それを枝を切って、こう植えるとすぐ大きくなるらしいんです。それを、また。現金獲得のために、産業として構築していこうっていうアイデアを出してます。

波田地：（井本さんは）すばらしい革命家ですね。

上川：頭が下がります。私はずっと彼のそばで、プロジェクトっていうのはこういうふうに進めていくんだって、生で10年間見れたんで、なるほどなって、彼みたいにはできないですけども、こういうふうにすれば人が、共感が得られたりだとか、賛同が得られたりだとか、プロジェクトが回っていくだとか、みんな、その、そのなんていうかな？幸せになれるような、その草の根的な活動っていうのはこうやるんだっていう事を教えていただいたなっていうふうに思ってます。

波田地：この方は28才までは、何されてたんですか？JICAとか、ああいうので

上川：ボランティア活動を、

（会場から）なんか、そういうJICAとか、ああいうので活動されていたとか？

上川：そうですね、うーんと、JICAじゃなくて、なんでしたっけ？

（会場から）JVC（日本国際ボランティアセンター）。

上川：JVCか、ごめんなさい。もともとの、彼の話にもあるんですけど、ベトナム戦争の映像を小さい子供のころテレビで見たそうです。そのときに、遠い国の事だけれども自分が関わってるなと思ったらしいです。自分のせいでこうなってると思ったらしいです。だからそれを何とか止めようっていうふうに発心して、ボランティアの世界に入っていったとってました。

波田地：この方が、日蓮宗系で出家しようと思った動機はなんなんですか？

上川：それは（井本さんの）おじさんがですね、福岡の報恩寺というお寺で、単立のお寺なんですけども、お寺もされてて、成人になったら坊さんになれつと言われてたらしいんですけど、自分はボランティアの道を進むとって、一回蹴って、自分のやりたいことやった。しかし、結果的にボランティアは、「飴と鞭」の飴の役を、やっているというふうに感じたらしいです。戦争が鞭だったら、その戦争でぶっ潰したところを、こんどボランティアが入ってって、こんど復興させていく。でもお金の出所はいつも一緒。壊して作るようなことでお金が回っている、そのように感じたらしくて、それを違う視点から変えていくためには、仏教って言うものが必要なんじゃないかっていうことで、改めて出家し直してっていう事が、この話の流れに入ってきます。

波田地：ありがとうございます。

澁澤：ちょっとお聞きしたいのですが、斉藤大法さんが話された「地球平和構想」という大きなテーマに絡めていけば、創価学会も地球民族主義とか仏法民主主義という理念を出していますので、波田地さんに斉藤大法さんの話についての感想をお聞きできればと思うのですが。

波田地：創価学会もまったく同じネットワーク作りで、いまSGIのメンバーが世界中にいますね。例えば（日本が）韓国と喧嘩しても、韓国に100万人ぐらいメンバーいますから、韓国とはちょっと戦争しようとは思わないですよ、創価学会としては。その相手国と戦争しようという場合は、やはり同じ宗教を持つてるメンバーがいるということは、組織が活きると思いますね、そのネットワークが広がっていけばね。

澁澤：実情としては、大法さんの構想とはかなり重なるわけですね。

波田地：重なりますし、まあ、大法さんの目指してる方向に（創価学会は）池田名誉会長の力でいいとこまで進んだけど、それ以上進めなくなっちゃっている。行き詰っているというのが、いまの創価学会の現状のように思えます。だって、もう安倍政権と一緒にあって、何でもありになってますから。

工藤：今の話に関連してですね。ドイツのハンス・キュング（Hans Küng）という神学者(22)が、Global Ethics（地球倫理）という概念を出しました。結果的には、殺してはいけないとか、いくつかの宗教の共通点を集めて普遍していった人がいるわけですね。ですから先ほどのお話とかなり共通することもあるなあと言う思いで聞かせてもらったんです。何か機会があったら、ハンス・キュング先生についても読んでいただければと思います。「地球倫理」(23)ということ提唱しています。

斉藤：ありがとうございます。ハンス・キュングですね。そういう方向にこられている方ってというのは、結構出てきていると思います。環境問題に取り組んでおられれば、そういうところに到達してくるし、原因としての経済のことを考えないわけにはいかない。資本主義そのものが限界に来ていると考える方々も多い。その仕組みをちょっといじっただけでは、もう解決できる状態ではないと、考えている方もある。根本的に変わってこない限り、その結論の、負の側面が、地球環境の問題だとか、資源の枯渇とか、エネルギーの問題、それから格差の問題。あるいは人間の精神の崩壊も。

私が、関心があるのは、「うつ病」のものすごい増大とかですね。実は経済の仕組みが、人間を非常に過酷な状況に追い込んでいくという。個人の問題だけではなくてですね。どこをとっても・・・、あるいは、製薬会社と医療界の癒着の問題。昔からあったにしても、たとえば倫理委員会が立ち上げられても、まさにそこで癒着の問題が起こってしまう。そういう状態がなぜ起こるのか。経済(金)というものに非常に汚染されている。だから、ローカリゼーション、自分たちがコミュニティーを作ってって自分たちのものとして取り戻さなければならない、と。さっきも話してたんですけど、経済の仕組みをなんとかする事と同時に、人間作り、社会作りを同時に進行して、より民主化という事も、成熟していく。グローバリゼーションによって支配されている状況から、いかに脱して、私たちの経済、私たちの社会を作ることが出来るかという議論は、大変なことですけどもやらなきゃならない。

澁澤：ありがとうございます。そこで、グローバリゼーションについてなんですけれども、四方僧伽というのは、西洋的なグローバリゼーションに対抗しての、仏教徒のコミュニティー作りの試みなのではないかと

思うのですね。世界の仏教徒は近代に入っても今まで、小乗仏教だ、大乘仏教だ、また日本仏教、中国仏教、韓国仏教と分かれていて、共通した一つの仏教的世界、協同する仏教的共同体が作られているわけではないですね。それに対して、キリスト教なんかは、カソリックがバチカンを中心とした世界宗教として、グローバルに戦略的に活動しています。プロテスタントはいろいろで、日本の新宗教のようですけども、それでも世界進出をするっていう形で広がりがあります。

また最近では、イスラムです。イスラムが、ホメイニのイラン革命から逆襲を開始し始めた。要するにそれまでにイスラム世界で西洋化・近代化されてたものを、いきなりイスラムの基準に戻しているわけですね。それは、今まで西欧化されてたものへの、西欧のグローバリゼーションへの対抗原理として、イスラムのグローバリゼーションをやろうとしているわけです。そこで、その内田樹（うちだ・たつる）(24)さんと、中田さん（中田 考）(25)という人の対談を最近読みまして(26)、中田さんはイスラム教徒なんです。中田さんが言っているのは「カリフ制」(27)を昔のように復活したいというわけです。

上川：カリフというのは？

澁澤：カリフはマホメッドの後継者のことですが、イスラムという一つの家を治める人ですね。イスラムというのは一つの家だって言うのですが、つまり、イスラムには国境がないわけですね。そもそも遊牧民の文明なんで、国境なんかで障壁をつくられたりしたら、商売が出来ないわけなんですね。そういうところがあるのが、イスラム。で、要するにカリフ制を復活して、お金の縛られない相互扶助の精神がきわめて高いイスラムの世界を復活する。国境を廃してのイスラム本来の形に持って行きたいという話しをするわけですよ。

そうすると、じゃ仏教はどうかと。仏教は、実はイスラム的なスタンダードがないわけですよ。つまりイスラムだったら、世界どこでもすべてアラビア語でコーランを読むという。どこ行ってもメッカに向かって礼拝（らいはい）ができるというようなスタンダードがあるので、世界中どこでもモスクがあれば行ってお祈りが出来るという環境が整っているんですね。それに対して、仏教徒のコミュニティーはどうなっているんだろう？っていう事を考えた時、四方僧伽がやろうとしたネットワークिंगというのは、これは仏教徒でのスタンダードといたしますか、共通の意識を作って、仏教徒のグローバリゼーションを起こしていくという事の魁（さきがけ）だったのだと見ることができる。

しかし、創価学会や立正佼成会などは、すでに、四方僧伽よりはるかに早くカンボジアとか東南アジア諸国に対しての仏教徒支援をやっていたわけですけども、その違いって言うのは何かということですね。私が思うに、そうした新宗教教団がいわば自己肥大的に世界中に拡がっていくというあり方がありますが、四方僧伽はそうではなくて、世界同時平和法要というのが象徴的ですが、さまざまな地域や国の仏教徒がその場で、自立した形でネットワークされて拡がっていくというあり方を目指したのではないのでしょうか。そうした仏教徒圏というか、一種のセンター構想があって、ネットワークで繋がっていく仏教共同体です。つまり、中心がないってことなんですね。中心としての大本山を作っていないわけです。本来の意味でのネットワークという事での、西洋的なグローバリゼーションに対抗する共同戦線、あるいは仏教徒共同体の構築を目指した、それが新しいんじゃないかと思っていたのですが。

そう思っていたので、先ほどの大法さんの話が気になっていました。つまり、自己の中心から、国家へ、世界へと広げていくとおっしゃったんですけども、私は自己を中心としてから国家中心、世界中心へと意識の拡大化を図るのではなくて、そこには自己に回収できない別の人がいるんだという認識が必要で、そうした相対化や相補性の問題のほうに自己意識を持っていくべきだと思うんですよ。もちろん片方には「共感」という重要性も力説されていますが、やはり自己から世界へ拡大していく方針というのは、ちょっと、危ういかなと思ったわけです。またそれは、今まで新宗教が世界に進出していった意識と共通するんじゃないかな、という感想です。

斉藤：これはですね、個人の中の、世界中心といっても、個人の中の意識の問題なんです。価値観を自分の中でどうするか。最初に心理学のところから取ったんです。

澁澤：ああ、私の勘違いですか？

齊藤：そうではなくてですね。人間の成長の過程だということ。だから、最初の自己中心的なものから、自我が出来るっていう事は大切なことなんです。それが、あることによって、集団的な、あるとこまで成長していくと、もう一步そこを乗り越えた、集団への帰属とか、その中に自分自身を見出すことが出来るようになるわけです。

しかし、得てして、ここの二つのところで終わってしまうために、やはり対立が、そこを軸に起こるわけです。もちろん、そこを踏んでくるわけです。捨てちゃうんじゃない。そして、それをもう一つ行ったところの意識、さっきの互いということに、それは近い。ほかの価値を尊重し、認め、考える。こういう事が出来るようになるという。そういう意味なんです。すみません、説明不足で。(※簡単に言えば、世界的視野に立たない限り、問題の解決法を導くことは難しい、ということ)

西山：いまの話と関連しますが、田中智学(28)の三男坊の里見岸雄(29)さんは「本門戒壇」とは、お坊さんも宗教も関係ないような「妙法センター」ではないかと言ったんです。目覚めた個人が集う妙法センターが世界中にあることが、つまり「本門戒壇」なんです。世界中で信者が増えたり、ドンドコ法華が多くなったって、ぜんぜん関係ない。要するに、世界が「目覚めた個人」で満ち溢れること、世界がそのようにならないと「本門戒壇」の状態にならないって言ったんです。これは宗教の世俗化を考えてるのかなと思えるのですが、大変面白い見解ですね。だから創価学会とか、立正佼成会とかの信者が世界に増えるとか、ドンドコ法華の数が多くなるとかは関係なく、ポイントは、いかにして目覚めた個人を溢れさせるか、人を作るかということで、つまり四方僧伽の運動もそうだと思うのです。

そのためには、マックス・ウェーバーが「エートス」(30)といましたが、本化人と呼ばれるような本化の教えを体現した目覚めた個人、そうした倫理的生活的態度を身につけた人々をたくさん育てていく、それしかないと思うね。その点についていえば、本化ネットワーク研究会も四方僧伽も同じようにあるわけです。ただ問題は、あと何年で世界がそうした戦争をしないような理想の状態になるかということですね。さっき齊藤さんは「2030年までに」といわれたが、なんで2030年か分からなかった。小野寺(防衛相)さんは50年後といっていますね。しかし、齊藤さんは50年では遅すぎるといったけど、なんか根拠はあるんですか？それが、末法(31)がそれで終わっちゃうとか？(笑)。そういうことですか？

齊藤：いやいや(笑)。あの根拠としてはですね。実際、2050年ってしたんだが、ある方が「遅すぎる」って言ったんです(笑)。で、2030年代。2030年代って、そういえば、たしか(日本の)原発がその辺のところで終了できる。そんな年代だなんて、不思議だなあと思ったのが一つ。それから、(地球)温暖化の問題で、今世紀中に最大4.8℃(の気温上昇の予測)っていうのは、とてつもない高さで、人類滅亡の危機ともいえる高さに。

西山：(気温上昇の予測については)IPCC(気候変動に関する政府間パネル)が言ったことですか？

齊藤：はい、IPCCの第5次報告。かなり、精度が高くなったらしくて、いろんな検討批判を加えた上で、検証した結果らしいんですが、そうしたときに、今世紀末に最大で(気温の4.8℃上昇の予測)ってことは、その前にもう一つ。2℃を回避したいらしいんですね。2℃の(気温)上昇を越えると、それからもう止めても、(気候変動の)暴走が止められない。それで、2℃以内にしたいと言うのがポイントらしいんです。そちらの専門家によると。その辺の、年数がいつごろになるかと言うと、もっと早いんです、かもしれないというくらいに言われているのです。ですから、いま、産業革命から、0.86ぐらいに・・・、だけど、今スピードが速いので、これからは、ググンって行ってしまう。このままで行くと。それは、もう、ですから2030年とか、そんなぐらいでないと、ということなんです。

西山：間に合わないということですか？

齊藤：間に合わない。だから、そりゃ、その温暖化の一個の問題ではなくて、全体的な変動として起るのです。例えば、もう、すでにある方が言ったんですけど、夏に雪が降った国があるんですね。それが『立正安国論』の「夏が冬になる、冬が夏になる」(32)、なんていうか、それに近い状態がちらほら出てるって

事のように。だから、まさかって思ったんですけども、昨日ある専門家から聞いたことなんです。ですから、それはね、ゆっくりはしてられない（笑）。焦ってもしようがないんですけど（笑）。

西山:それで30年・・・

上川：（挙手して）いいですか？（西山）先生がさきほど、目覚めた個人の創出が一番大事だというふうに言われて、ボクも本当にそう思います。それで2点のケースを紹介させていただきたいんですが、まずはバングラデシュなんですけれども、今のバングラデシュの（四方僧伽の）中心メンバーで、アウンさんという方がいます。種族は、なんだっけ、チャクマかな？チャクマ族っていう、バングラデシュですけども、ビルマ系仏教徒なんです。やはり、ビルマ人なんだけども、国として国境のラインが引かれたときに、バングラデシュに入ってしまったって、バングラデシュはイスラム教国なんで、仏教徒は1パーセントもないんですね。非常に迫害されているというか、いろいろな迫害を受けています。

彼が、この四方僧伽にかかわり、プロジェクトが立ち上がって、プロジェクトを推進してもらっています。私が初めてバングラデシュに視察に行ったときに、彼と、伊勢（伊勢祥延氏）さんもいたんですけども、ボクは英語しゃべれないんで、通訳してもらって聞いたのが、（アウンさんが）「ボクはこの活動に関わって、すごく幸せだ」って言うんですね。それは何故かって（上川が）訊いたんですね。（アウンさんが）「自分の家は貧しかった、兄弟もたくさんいて、お寺にお世話になってた」。たしか、6歳から9歳までの間だったかな？お寺にお世話になって、食べ物とか、着るものとか、住居とか助けてもらった。その事を自分の中では、いつかお返ししたいと思っていた。それで、「この活動に出会えたことによって、それをお釈迦様にお返しできる機会を与えてくれたことに、すごく感謝している」って言うふうにいわれたんですね。それが、一つの目覚めた個人のケースだと思うんです。

その内面的にあるものを、発露させるきっかけが必要であって、それが仏教のつながりのネットワークのなかで起こすのが大事だと思ってます。

もう一つのケースはですね、先ほどもチラッと出たんですけども、ビルマ人のアシンバヤマさんっていうお坊さんなんですけども、彼は、もちろん上座部の僧侶で、戒律守って、たくさん信者さんの、ほんとにカリスマ的な僧侶で、軍政に何十年も牢屋に入れられてたような人。非常にリーダー的な存在です。その彼も、四方僧伽の運動に入ってきたときに、そのときにボクらが、「仏陀バンク」を始めようというような構想があって、彼もそれに賛同して、「自分もやりたい」と。

でもですね、戒律で、お金にタッチしてはいけないっていう戒律があるらしいんですよ。ボクもそういうの詳しくないんですけど。でもそれは、本当に突き詰めて考えた時に、その戒律を越えて行ったときに、人の幸せが、そこにあったんですね。彼も、四方僧伽に、非常にお礼を言ってます。こういう事を、自分たちの上座部の教えの中では、そういう発想がなかったっていう言い方で。これも、やはり目覚めた個人の一つの形だと思うんです。

私たちは、そういう方たちと一緒に呼吸をしながら、一緒に生活をしながら、寝食をともにしながら、彼らが何を考え、どう生きて、これからどういうふうに進んでいくんだろうかっていう事を感じ、それと付随して自分たちは、どこに向かって進んで行くのかっていう事をお互いに緊張関係の中で、刺激しあいながら、「自分たちはここまで進んだよ」、「自分たちはここまでやったよ」って、それを年に一回集まって報告しあう、刺激しあう。みんながんばってるから、仲間ががんばってるから、自分たちもがんばろうよっていうのが、ボクらのモチベーションなんです。

西山：本当に、変わっていくわけね。

上川：もう、目の前で変わっていくんです！人も変わるし、状況も変わるし、コミュニティーが変わっていくんです！目の前で！

西山：じゃ、人間革命！

上川：それは、やっぱり、すごく、ボク自身は関わらせていただくご縁があって、よかったなって思える、瞬間なので・・・

西山：すばらしいね！

澁澤：すみません、もう予定の時間も過ぎていますので、最後にご質問あるいはご意見があればお一人だけ。特になければ、これで終わらせていただきます。本当に長時間に渡って有難うございました。

(拍手・拍手・拍手)

(終わり)

(脚 註)

「開会のあいさつ」・「四方僧伽の現況と未来～上行プロジェクトとしての活動報告～」

(1) 本化ネットワーク研究会 ほんげねつとわーくけんきゅうかい:東洋大学名誉教授の西山茂(宗教社会学)が「日蓮主義の再歴史化」をめざして広く日蓮門下(本化門下)に呼びかけて立ち上げた研究会。平成17年1月より毎月の例会と年1回の夏季セミナーを開催して、本化門下のネットワークを図り、宗派を超えての論議の場として日蓮聖人の教えを現代に活かすことを実践。研究会部門の他に本化ネットワークセンターとして出版部門もつくり、本化ネットワーク叢書を刊行。また、西山の提案により本下門下を「本化人」、日本を「常不軽国家・日本」、また日蓮の「代受苦」の思想から、国土の難など集団に共通する業(共業)を、自らの苦として担い解決に向けて転じていく(担転)ことを「担転共業」と呼ぶなど、多くの造語も作って、日蓮主義の再歴史化を模索している。

(2) 本化仏教 ほんげぶつきょう:日蓮の仏教を「本化仏教」とも呼ぶ。本化とは「本仏の所化」の略で、本仏より教化せられた所の弟子を指している。つまり本化とは、本仏から仏国土建設の使命を託された弟子たち(地涌の菩薩)であり、本化仏教という言葉は、その社会的実践という使命を強調した言い方である。

(3) 四菩薩プロジェクト:本化ネットワーク研究会の主宰者・西山茂が提唱している日蓮門下における実践課題で、以下の通り上行・無辺行・浄行・安立行の四菩薩の徳性に従って本化の実践分野を分けて課題化している。①上行=佛道無上誓願成(立正安国)—正義・公正・平和・人権・平等—虐げられた人々への共感・連帯・支援活動。②安立行=衆生無辺誓願度(抜苦与楽)—医療・保健・福祉・経済・経営—苦しむ人々への同悲同苦と抜苦与楽。③浄行=煩惱無数誓願断(洗心浄土)—宗教・教育(一念)・環境(三千)—人々の心身と環境世界浄化への啓蒙・実践活動。④無辺行=法門無尽誓願知(究理潤世)—教学・現代思想・科学技術・社会科学—共に教えを究明し体得するための研鑽活動。

(4) 上行プロジェクト:上記と重なるが、上行菩薩の使命を「立正安国」の理想実現として、虐げられた人々への共感と正義・平等・平和・人権の理念にもとづき、仏国土の成就をめざす全ての本化の活動を「上行プロジェクト」と呼ぶ。

(5) マハ・ゴサナンダ(Maha. Ghosananda) (1929～2007):冷戦とポルポト派支配の内戦下で疲弊の極に達したカンボジアの復興のために、1990年に「ダンマヤットラ」(法の行進)を組織して、カンボジア全土を行進して人々の相互不信を解き、非暴力によって紛争を解決し、平和をもたらす上で絶大な貢献をした。著作『微笑みの祈り～智慧と慈悲の瞑想～』、春秋社、1997年。

(6) 土屋信裕 つちや・しんゆう:東京都出身。顕本法華宗の僧侶。35歳で顕本法華宗の教師となる。航空自衛隊F4戦闘機幹部操縦士、大手商社を経てANAの機長の傍ら、宗派を超えて日本各地で講演を行い、アジアの仏教界と協賛して「妙法の行進」を5年間推進。2万冊の本多日生師選出の要約『妙法蓮華経』(現地語訳)を作成配布。現在は欧米に布教拠点を開設。著作に『明解法華経要義』土屋信裕(編集・現代語訳)、本多日生(講述)、海鳥社刊、2013年。

講演終了後の質疑応答

(1) 藤井日達 ふじい・にったつ(1885～1985):日本山妙法寺を世界中に建立。徹底した非暴力主義を提唱し、団扇太鼓をたたき世界中を行脚した。インドのガンディーとも出会い互いに共鳴しあった。

(2) ユヌス:ムハマド・ユヌス(Muhammad Yunus) 経済学者(経済学博士)、バングラデシュのグラミン銀行創設者。貧しい人々へ無担保・低金利で少額融資を行う「マイクロクレジット」を展開。世界の貧困問題解消に尽力した功績により2006年度ノーベル平和賞を受賞。

(3) 内外相対 ないげそうたい：日蓮聖人の立てた教判「五重相対」の一つ。内とは仏教のこと。外とは仏教以外の教えのこと。仏教と仏教以外の教えを相対させ仏教を選択する。

(4) 法華最勝 ほっけさいしょう：天台大師の教相判釈により、法華経が教典の中でもっとも重要な教典であった。

(5) 内典外典 ないでんげでん：内典は仏教の教え。外典はそれ以外の教え。

(6) 本化ネットワークの「現代本化人七訓」：現代にいきる法華経信者が心得なければ行けない七つの心得。特に他宗門や社会人としての振る舞いにバランスを持つ事の大切さを説いている。

(7) エンゲージド・ブuddiズム (Engaged Buddhism)：ベトナム僧のティック・ナット・ハーン (Thich Nhat Hanh) により作られた言葉。日本では、「社会参加仏教」、「社会参画仏教」、「社会をつくる仏教」、「闘う仏教」などさまざまな解釈、訳がある。【参考文献】大來尚順「エンゲージド・ブuddiズムの定義と日本語訳」武蔵野大学仏教文化研究所紀要(25)、43～61ページ、2009年。

(8) 五重相対の教学：日蓮聖人が立てた教判の一つ。開目抄に説かれていて、すべての思想を比較し、五段階に選別する。内外相対・大小相対・実権相対・本迹相対・教観相対のこと。

(9) ダルマ (法) サンスクリット語:dhárma、パーリ語: dhamma、

(10) サッダルマ (妙法) =妙法蓮華経、サンスクリット語:サッダルマ・プンダリーカ・スートラ、Saddharma pundarika-sutra、

(11) 上座部仏教 (Theravada Buddhism)：スリランカ、タイ、ミャンマーに伝わった南伝仏教の総称。戒律を守り自己の解脱を目指すのが特徴。

(12) 上座部仏教と法華の違い：ここでは上座部は「ダルマ (法)」、法華は「サッダルマ (妙法)」の違いをどのように理解するかを問いかけ。

(13) 施本：教典を配布する事による布教方法。

(14) バツタンバン：カンボジア北西部に位置する州。

(15) 井本勝幸 (著) 『ビルマのゼロファイター ～和平実現に駆ける一日本人の挑戦～』集広舎、2013年：井本が、ミャンマーに単身乗り込み、少数民族の団結と自立支援のため「UNFC (統一民族連邦評議会)」を設立し、政府との和平対話に漕ぎ着ける過程を記した。書名は、愛車の通称ゼロ・ファイター号に由来。

(16) カチン州：ミャンマー (ビルマ) 北部に位置する州。シャン州、ザガイン管区、中華人民共和国、インドに接する。

(17) シャン州：ミャンマー (ビルマ) 東部に位置する州。カチン州、ザガイン管区、マングレー管区、カレン州、カヤー州、中華人民共和国の雲南省、ラオス、タイと接する。

(18) カレン州：ミャンマー (ビルマ) 南東部に位置する州。カヤー州、タイ国と接する。

(19) 援蒋ルート：日中戦争から太平洋戦争にかけて、アメリカ、イギリス、ソ連などが、日本と交戦中だった蒋介石率いる国民政府を支援するため、軍需物資を送り込んだルート。

(20) 小島さん：小島知広。日蓮宗の僧侶。四方僧伽メンバー。東京都大田区久ヶ原の長久山安詳寺住職。平和運動を意識し世界中を行脚。近年は東南アジアを中心に現地の人々と直接ふれあいながら支援を続けている。2010年、カンボジアに仏陀の池 (安詳池) を寄贈。2013年3月から2014年3月まで四方僧伽の二代目代表を務めた。

(21) チェンマイ：タイ北部最大の都市。首都バンコクの北方約720キロに位置する。

(22) ハンス・キュング (ハンス・キューンの表記もある) Hans Küng：ドイツ出身のカトリック神学者。「地球倫理財団」会長、世界宗教者平和会議 (WCRP) 国際委員会共同会長。キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、仏教など諸宗教の類似性・共通性を研究。宗教の普遍的価値をより現実的・具体的にした「地球倫理」を提唱している。

(23) ハンス・キュングの主な邦訳著作、カール・ヨーゼフ・クシュルと共編著・吉田収訳『地球倫理宣言』世界聖典刊行協会、1995年。

(24) 内田 樹 (うちだ・たつる)：東京都大田区出身。哲学研究者、思想家、倫理学者。

(25) 中田 考 (なかた・こう)：岡山県出身のイスラーム学者、哲学博士。同志社大学神学部元教授。元日本ムスリム協会理事。

(26) 内田 樹さんと中田さんの対談：内田 樹・中田考（著）『一神教と国家 ～イスラーム、キリスト教、ユダヤ教～』（集英社新書）、集英社、2014年。

(27) カリフ制：カリフは「ムハンマドの後継者」の意味。宗教的権限を除く政治・社会に関する権限を有しイスラーム共同体を指導した。中田は、イスラーム世界に対し「現代の二大偶像神たるリヴァイアサン（権力=近代国民国家）とマモン（富=不兌換紙幣）の支配打破とカリフ制再興」を主張している（中田考ホームページ「学問の目標」より一部引用）。

(28) 田中智学 たなか・ちがく（1861年～1939年）：近代の日蓮系の在家仏教運動家。思想家。10歳で日蓮宗に入りますが、1879年（明治12年）脱宗還俗。宗門改革を目指し1880年（明治13年）に横浜で「蓮華会」設立。1884年（明治17年）に「立正安国会」と改称、さらに1914年（大正3年）に「国柱会」結成。著書に『宗門之維新』、『本化撰折論』など。

(29) 里見岸雄 さとみ・きしお、（1897～1974）：法学者、立命館大学法学部元教授（法学博士）。田中智学の三男。1924年に兵庫県西宮に里見日本文化研究所（後に里見日本文化化学研究所と改称）を創立。1936年に日本国体学会を創立。戦後は日本国体学会を主催しながら憲法改正運動を提起。『日本国体学』全13巻を執筆するなど著作と講演活動を続けた。主要著作に『國體に對する疑惑』里見研究所出版部、1928年、『天皇とプロレタリア』アルス、1929年、『日本国の憲法：特に天皇問題を中心として』錦正社、1962年、『日蓮・その人と思想』錦正社、1960年など。

(30) マックスウェーバーの「エートス」概念：エートス（ギリシャ語）は①住処、②習慣、③性格・気質などを表す語だが、ギリシャ人は音楽が人々の心に作用して高い徳性を育てる力に着目して「音楽のエートス」と呼んだ。アリストテレスも人の魂を教育する方法の中心に「音楽」を置いて、『弁論術』の中では相手を説得する3つの要素として「ロゴス（論理）」「パトス（感情）」と共に「エートス（人柄）」をあげている。ウェーバーはこの徳性を育てる「音楽のエートス」の意味を社会認識の軸として捉え返し、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で論じられたように、生活態度・心的態度・倫理的態度という性向（エートス）が、人間の行動を規定して歴史に及ぼす働きを社会的に解明した。現在では、さまざまな社会集団や階層についてエートスが語られているが、一般的にはある社会集団・民族を支配する倫理的な心的態度をいう。

(31) 末法：仏教の時節観。正法・像法・末法の三時からなる。特に末法は仏の教えが効力をなくしてしまう時期とされる。

(32) 『立正安国論』の「夏が冬になる、冬が夏になる」：「時節返逆して冬雨ふり、夏雪ふり・・・」